

| | |
|------|---|
| タイトル | 「この街には人種隔離などありません」：20世紀前半のボストンにおける黒人コミュニティの分断と反差別論の混迷 |
| 著者 | 大森，一輝；Omori, Kazuteru |
| 引用 | 北海学園大学人文論集(64)：97-115 |
| 発行日 | 2018-03-31 |

「この街には人種隔離などありません」 — 20世紀前半のボストンにおける 黒人コミュニティの分断と反差別論の混迷 —

大 森 一 輝

はじめに

1938年4月、ボストンの黒人向けセツルメント施設ロバート・グールド・ショー・ハウスの館長だったジュリアン・スティールは、その職を辞することを余儀なくされる。原因は彼の結婚であった。アメリカ最古の公立学校であり全米屈指の名門校であるボストン・ラテン高校を経てハーヴァード大学を卒業し、奨学金を得てニューヨーク社会福祉大学院（後にコロンビア大学に統合）で学んだエリートであったスティールが、ショー・ハウスで働いていた大卒の熱心で優秀な同僚女性と恋に落ち結ばれることには、何の問題もないように思えた。新郎が黒人、新婦が白人であることを除けば¹。

本稿は、アメリカにおける自由発祥の地と呼ばれ、古くから奴隷制廃止運動の中心地であり、南北戦争以前から州内の人種差別を法律で禁じ、戦後もその改正・強化を続け、19世紀末には「黒人の天国」と称されるまでになった街ボストン²における、20世紀前半の人種関係の実態を明らかに

¹ W. E. Harrison, “The Robert Gould Shaw House,” *Crisis* 44 (March 1937), 79-80; “An Ordinary Love Story — Is Julian’s: But the Public Looks To the Racial Side of It,” *New York Amsterdam News* (以下、NYAN), May 14, 1938, 2.

² “Boston as the Paradise of the Negro,” *Colored American Magazine* 7 (May 1904), 309-317. 19世紀のマサチューセッツ州公民権法については、次を参

する試みである。

ボストンの黒人を研究する歴史家は、現在でも依然として「差別のない街」という神話に囚われ続けている。差別禁止法制は、その適用（法という建前の裏の現実）を精査せずに、称揚される³。それでは、平等な権利を勝ち得た後でも暮らし向きが良くならないのはなぜなのか、説明できないのに。あるいは、この進歩的な街に人種主義が根強く存在することを認める研究者も、だからこそアフリカ系住民はそれに対して一丸となって立ち向かってきたという単純な解釈に陥っている。1960年代以降バス通学によって公立学校の人種隔離をなくし教育環境を改善しようとする激しい戦いが繰り広げられたことから「逆算」して、それ以前にも抗議の伝統があったとする単線的な闘争史観を再生産しながら⁴。

いずれの立場も、禁止されていたはずなのに差別が横行し、闘っていたのにそれをやめさせられなかったのは「なぜ」なのか、その理由を黒人コミュニティ内部の確執にまで踏み込んで別決できずにいる。以下では、この課題に答える準備作業として、当時の北部の代表的な黒人新聞2紙（*Chicago Defender* と *New York Amsterdam News*）の記事を素材に、それをボストン最大の日刊紙 *Boston Globe* で補完しつつ、第一次世界大戦か

照。Kazuteru Omori, "Race-neutral Individualism and Resurgence of the Color Line: Massachusetts Civil Rights Legislation, 1855-1895," *Journal of American Ethnic History* 22 (Fall 2002), 32-58.

³ Millington W. Bergeson-Lockwood, "We Do Not Care Particularly about the Skating Rinks: African American Challenges to Racial Discrimination in Places of Public Amusement in Nineteenth-Century Boston, Massachusetts," *Journal of the Civil War Era* 5 (June 2015), 254-288.

⁴ Zebulon Vance Miletsky, "Before Busing: Boston's Long Movement for Civil Rights and the Legacy of Jim Crow in the 'Cradle of Liberty,'" *Journal of Urban History* 43 (March 2017), 204-217. 『都市史研究』のこの号では「『ボストン・バス通学危機』再考」という特集を組んでいる。編者による解説および他の論考も参照のこと。

ら繁栄の1920年代・大恐慌の30年代を経て第二次世界大戦に至る激動の時期のボストンで、一貫して続く差別に対して、誰が・どのような「平等」を求めていたのかを再現する。

1. 人種平等理念の欺瞞

マサチューセッツは、人種間結婚に寛容な土地柄として知られていた。異人種の婚姻を禁じていた法律を撤廃したのは、スティールの配偶者選択が物議を醸す95年も前の1843年のことだったし、その84年後(1927年)に州議会に出された禁止復活の企ても、黒人たちの反対運動が功を奏して廃案となった。実際、1910年代以降減少傾向にあったものの、州都ボストンは国内の主要都市のなかでもっとも人種間結婚が多いと言われていたのである⁵。

しかし、そのほとんどは(比較的裕福な)黒人男性と(貧しさから脱しようとしていた)移民女性の組み合わせであった。こうしたカップルは、白人・黒人双方から疎まれ、場合によっては蔑まれながらも、北部の大都会ではそれほど人目を引くことなく暮らすことができた⁶。では、なぜスティールの件は大問題になってしまったのか。それは、花嫁が極め付きの名門家系の出だったからである。メアリー・ドーズは、アメリカ独立革命においてイギリスとの武力衝突の火蓋を切った1775年4月のレキシントン・コンコードの戦いの直前に英軍の動向を植民地側の民兵隊に知らせるためポール・リヴィアとともに深夜早馬を駆った英雄ウィリアム・ドーズの直系の子孫であり、1925年から29年まで第30代アメリカ合衆国副大統領

⁵ Zebulon Miletsky, "The Dilemma of Interracial Marriage: The Boston NAACP and the National Equal Rights League, 1912-1927," *Historical Journal of Massachusetts* 44 (Winter 2016), 136-169.

⁶ Adelaide M. Cromwell, *The Other Brahmins: Boston's Black Upper Class, 1750-1950* (Fayetteville: University of Arkansas Press, 1994), 183-186.

領を務めたチャールズ・ドーズのごく近い親戚(又従兄妹)だったのである⁷。

メアリーの両親は、2人を別れさせるために、娘をヨーロッパに2年も留学させたものの、帰国後も付き合いが続いているのを見て、ようやく交際を認めた。しかし、それは祝福ではなく諦めであった。父親は、新聞のインタビューに、「夫婦になるのは無理だと娘にわからせようとした…が、いくら言ってもあの子は聞き入れなかった。やれることはすべてやったが、効果はなかった。…もう大人なのだから、自分が何をしようとしているのかわかっているのだろう。とにかく、妻も私ももう何も言わないことにした。言っても無駄だろうから。私たちにこれ以上できることはない」と語っている⁸。

渋々とはいえ親も承諾した結婚が「スキャンダル」になってしまったのは、黒人指導層内部に見解の相違と対立があったことも一因だが(これについては後述する)、スティールがショー・ハウスの館長を辞任させられた背景には、理事をしていたリベラルな(はずの)白人篤志家の抜き難い人種偏見があった。抽象的な理念としては人種間結婚に賛同できるが、それが現実に自分たちの属する階層にまで迫ってくると嫌悪を抱き⁹、しかも、その感情を自分のものだと認められず、「『常識的に』考えて…そのような結婚をすれば、白人支援者からの寄付が失われ、何千人もの恵まれない(黒人の)子どもたちが苦しむことになる」という言い方で、反対するのは世間だと責任転嫁したうえで、強行して居座れば事業に支障をきたすと脅したのである。スティールは、自分の結婚がセツルメントの運営の障害にな

⁷ Marvel Cooke, "Jealousy Caused Julian D. Steele Ouster In Boston: Shaw House's Head Marries Dawes Cousin," *NYAN*, May 14, 1938, 1.

⁸ "An Ordinary Love Story," 2.

⁹ "Steeles Prove Mixed Marriage Will Work: Harvardman and Kin of Former Vice Pres. Charles Gates Dawes Living Happily In Staid Old Boston," *NYAN*, November 4, 1939, 5.

るという懸念があるのなら、と辞意を表明した¹⁰。

これこそが、長年「リベラル」だという名声を得てきたボストンの仮面の下に隠された「根深い偽善的な社会哲学」であった¹¹。『アムステルダム・ニュース』は、一連の騒動を大々的に伝えた1938年5月14日付けの紙面の別のページに、「世界の中心」を自認する都市における黒人の境遇を皮肉る論説を載せている。執筆者は、当時同紙の編集部にはハーヴァード卒の黒人ジャーナリスト、アール・ブラウン¹²。彼は、学生時代を過ごした「アメリカのアテネ」を、黒人に平等な権利と施しは与えるが自営か専門職以外の仕事には就かせない（黒人が仕事を得るのは駱駝を針の穴に通すほど難しい）自由ではあるが「矛盾に満ちた街」であると呼ぶ¹³。同紙は、翌年にも、「すべての人種・民族にとって、これら（北東部）の諸州には、教育上の、そして文化的な利点は数えきれないほどあるが、学問と教養を身に付けても、ニューイングランドでは、黒人の雇用機会は（南部を含めた）他の地域とまったく同じように限られている」からこそ多くの才能が流出する、という特集を組み、ニューヨークに移って活躍する様々な分野のボストン出身者を紹介した。そこには、ジュリアンの兄のジョー・スティール（ニューイングランド音楽大学を卒業したジャズピアニスト）と妹のエタ・スティール（兄ジュリアンと同じ社会福祉関係の事業所に勤務）も含まれていた¹⁴。黒人の権利を最初に認め、それ以来「市民としての権利を

¹⁰ “Fear Interracial Marriage May Hurt Community House,” *Chicago Defender* (以下, *CD*), April 2, 1938, 4; Elliott Freeman, “Kin of Ex-Vice President to Wed Race Man: Betrothal Shakes Boston,” *CD*, April 23, 1938, 1.

¹¹ Cooke, “Jealousy Caused Julian D. Steele Ouster In Boston,” 1.

¹² *Jet*, May 1, 1980, 56; Pamela Newkirk, *Within the Veil: Black Journalists, White Media* (New York: NYU Press, 2000), 52-53.

¹³ Earl Brown, “Writer Bares Salient Facts about Boston: Analyzes Life in Hub City of 800,000,” *NYAN*, May 14, 1938, 11.

¹⁴ Thelma Berlack-Boozer, “Opportunities Appeal to New Englanders: New York Gives Big Assortment of Jobs,” *NYAN*, October 14, 1939, 13.

守る砦」であった誇り高きボストンでは、黒人であってもあらゆるところで慇懃に対応してもらえるが、失業率は40%に届こうとしていたのである。ハーレムのように大きな黒人社会がなく白人と同じ土俵で伍していかなければならない土地では、黒人扶助組織「全国都市同盟」のボストン支部事務局長が言うように、才能と努力と辛抱で地歩を築ける黒人のほうが例外で、自力で上昇した（と思い込んだ幸運な）者が学歴の高さや優雅な暮らしぶりを誇示しようとも、白人から見ればみな同じ黒人にすぎなかった。その地位も、暗黙のルールを守らなければ失うことになる。偏見はないと言いながら実権を握っているのは白人だったからである。その後もこの街は、黒人にとって「教育を受けるには素晴らしい場所だが、生計を立てるのは難しいところ」であり続けた¹⁵。同組織の支部長も言う。「1942年から1948年の間に都市同盟がボストンで（黒人に）斡旋できた仕事の90%は、家内使用人か単純労働だった」と¹⁶。

しかも、平等という大義の陰で、資格や技能の不足を口実にした陰湿な排除が行われただけでなく¹⁷、あからさまな差別にも事欠かなかった。ス

¹⁵ “Boston: The Citadel Of Civic Interests,” *NYAN*, October 21, 1939, 3; Seaton W. Manning, “Boston Fine For School But Not To Make A Living,” *CD*, February 5, 1944, 11.

¹⁶ Lance Carden, *Witness: An Oral History of Black Politics in Boston, 1920-1960* (Chestnut Hill: Boston College, 1989), 39.

¹⁷ 雇われないのは人種が原因だとは立証しにくく、戦時中に防衛関連産業での差別は大統領行政命令で一応「禁止」されたものの、それ以外の業種はそもそも規制の対象外だった。マサチューセッツは1946年に州法で雇用における差別を禁止したが、それを監視し訴えを調停する公正雇用委員会が機能し始めるのは1950年代に入ってからである。Pauli Murray, ed., *States' Laws on Race and Color* (Athens: University of Georgia Press, 1997), 217-224; Carden, *Witness*, 62-63. 1952年には、会社側が主張するように知識のなさや作業の遅さではなく肌の色だけを理由に解雇されたことが認められ、黒人自動車整備工が逸失賃金\$1,700を勝ち取った。“Mechanic Fired Because of Color Gets \$1,700 From Boston Auto Firm,” *CD*, May 10, 1952, 3.

ティールの「事件」が起こる前、1910～30年代初頭までに限っても、カフェでは白人と黒人を同じテーブルで食事させない、イタリア系の床屋も黒人の髪を切ろうとしない、ホテルは黒人団体にダンス会場を貸さない、高級スポーツクラブの食堂には白人チームメイトが頼んでも黒人選手は入れてもらえない、市営公園内の球場でも黒人チームはシャワー室を使わせてもらえない、中華料理店で中国人店主にも入店を拒まれる、大学の寮も人種別に分けられ学内で開催されるダンスパーティーのチケットも売ってもらえない、などの事例が『シカゴ・ディフェンダー』で報じられた¹⁸。

それでも、仔細に見れば、ボストンは南部と同じではなかった。黒人も大学に行けるし、スポーツチームのメンバーにもなれるし、球場自体は使わせてもらえる。より親密な接触の場での差別が耳目を引いたのも抗議する個人がいた／団体があったからだし、州の公民権法に守られているので公共施設での差別は提訴すれば負けることのほうが少なかった。しかし、事業者の側は、いくら罰金を科されても黒人を別扱いすることをやめなかった。事実、1940年代になっても、黒人客を泊めるホテルはほとんどなかった。『アムステルダム・ニュース』の女性記者が実地調査を試みたところ、人種にかかわらず国民を総動員している戦争の真っ最中だというのに、何軒電話しても、黒人だと明かすと断られ、その日の宿を見つけることができなかったのである¹⁹。軍隊内部にも人種差別はあった。ボストン近郊

¹⁸ “Fines Waiter \$100 for Drawing the Color Line: Boston Judge Calls Refusal to Serve Blacks and Whites Together Unfair Discrimination,” *CD*, November 12, 1910, 3; “Boston Judge Rebukes Barber for Discriminating against Race,” *CD*, June 26, 1915, 6; “Boston Club to Sue Big Hotel,” *CD*, June 7, 1924, 12; “Boston Club Draws Color Line on B. U. Grid Players,” *CD*, October 24, 1925, 2; “Park Worker Draws Color Line; Fired,” *CD*, August 16, 1930, 2; “Boston Chinese Draw Color Line; Haled Into Court,” *CD*, November 8, 1930, 13; “Boston U. Denies That It Segregates,” *CD*, November 29, 1930, 4; “Segregation Rises Again at Boston U.,” *CD*, December 29, 1930, 4.

¹⁹ Carolyn Dixon, “Boston Inns Bar Negroes: Best Hotels Violate Spirit of

の訓練施設に駐留していた陸軍女性部隊所属の黒人兵4名は、民主主義の勝利のために志願したのに肌の色を理由とした不公平な処遇をされたこと(黒人女性兵にだけ掃除をさせる, など)に反発したところ, 逆に軍法会議にかけられ, 1年間の重労働と不名誉除隊を申し渡されたのである²⁰。

ファシズムと人種主義を根絶するために戦っていたつもりのアフリカ系のアメリカ兵たちは, 地元で自分たちが差別されることに, 我慢の限界を迎えつつあった。1944年7月には, 休暇をボストンで過ごしていた多数の黒人兵が警官から嫌がらせを受けた(店が客で一杯だったため入り口で飲んでいただけなのに咎められ立ち去るよう命じられた)ことに端を発し, 3時間にわたって200人近くが警察隊と小競り合いを繰り返す事態が発生, 暴動への発展が危惧されたが, 29名の逮捕で一応の収束を見る。一部の黒人指導者は, ボストンの人種関係は良好で暴動など起こらないと力説したが, 「全国黒人向上協会(NAACP)」のボストン支部長に返り咲いていたジュリアン・スティールは, 黒人を不当に扱い不必要な暴行を加え続けてきた市警のほうに責任があると批判した²¹。その10年前の1934年には, 自宅で妻子と食事をしていたところ, 軽微な交通違反を理由に逮捕状を持ってやってきた車両検査官を見て怖くなった黒人清掃員が, 逃げ出しただけで撃たれて殺される事件も起きていた。しかも, 様々な黒人団体の正義を求める訴えもむなしく, 殺した側は無罪になってしまう²²。警察は, 黒人女性に対する白人男性からの性的嫌がらせや暴行も黙認したばかりで

Democracy," *NYAN*, November 28, 1942, 2.

²⁰ "Liberty-Loving Boston of Old, Now Hotbed of Prejudice, Strife," *NYAN*, March 31, 1945, 3A.

²¹ "29 Servicemen Arrested After Roxbury Melee," *Boston Globe*, July 3, 1944, 2; Herman T. Smith, "Boston Leaders Vow: 'No Race Riots Here,'" *CD*, July 8, 1944, 2.

²² Eben Simmons Miller, "'A New Day Is Here': The Shooting of George Borden and 1930s Civil Rights Activism in Boston," *New England Quarterly* 73 (March 2000), 3-31.

「この街には人種隔離などありません」（大森）

なく、自らそれに加担したうえで隠蔽した。黒人新聞『ボストン・クロニクル』の見出しになったように、「公道であっても変態や警官がいて安心はできないと（黒人）女性は言う」ような状況にあり、それどころか、家においても警官が勝手に侵入したあげく嘘をでっち上げた²³。戦後になっても警察暴力はやまず、黒人地区を狙い撃ちにして一斉検挙が行われるたびに無関係の犠牲者を生み出していった。1948年8月には、第二次世界大戦に従軍し退役後タクシードライバーをしていた黒人男性が、警官に口答えをしただけで逮捕され、連行された警察署では激しく殴られ、出血しているのに骨折した顎が化膿するまで放置された²⁴。相手が警官では司法も味方になってくれない。これが「自由の街」ボストンの黒人の日常だった。

2. まとまらない黒人コミュニティ

次世代を担う子どもたちを育てる学校も人種別になっていた。マサチューセッツ州では、1855年から公立学校の人種分離は違法とされていたので、南部のように制度として黒人専用の学校があったわけではないが、黒人が特定の地区に固まって住むようになったことの結果として、1930年代末までには事実上の黒人学校ができてしまう。ボストン市財政委員会主導で行われた1944年の調査では、市内の黒人はそのほとんどがサウスエンドとロックスベリーに集住しており、その中の2つの学校区では、小学校児童のほぼ100%が黒人になっていることが報告されている²⁵。そうし

²³ 警官が踏み込むのは、異人種間の性交渉が疑われた場合（マサチューセッツでは合法であったにもかかわらず）が多かったという。Sarah Deutsch, *Women and the City: Gender, Space, and Power in Boston, 1870-1940* (New York: Oxford University Press, 2000), 264-265.

²⁴ “Wholesale Arrests Accompany Wave of Police Brutality In Boston: World War II Vet Gets Jaw Fractured As Cops Launch Reign Of Terror,” *CD*, August 7, 1948, 5.

²⁵ George D. Strayer, comp., *Report of a Survey of the Public Schools of Boston*,

た学校の状態はあらゆる点で劣悪だった。特に酷かったのはサウスエンドにあった知的障害のある女兒のための特別支援学校で、黒人が90名の在籍者の4分の3を占めるこの施設は、市から委託を受けた調査チームですら、「ぼろぼろの古びた建物の中にあり、…そこにある設備・用具では知的障害のある子に本当に適した教育など行いようもない」ことを認め苦言を呈さざるを得なかった。必要なものがなくても頑張っ「この子たちを刺激し最高の力を引き出してくれるような若くて活動的な教師」もいなかったのだから²⁶。それは一般の「黒人学校」でも同じで、1937年にNAACPボストン支部が教育の不平等を訴えるために大規模な集会を開いたときの争点の1つは、中学校の進路指導担当が黒人生徒には高校ではなく職業訓練学校に行けとしか言わないことだったのである²⁷。

もちろん、黒人たちは、こうした状況に直面しながら、ただ手をこまねいていたわけではない。ただし、その足並みは揃わなかった。人種の境界線を消し去ることに生涯をささげ、全国的にも著名であった、ボストンを代表する黒人「解放」運動の闘士ウィリアム・モンロー・トロッターは、20世紀に入って以降、自分の街を含めた北部各地に南部の悪習が忍び込み、19世紀末の時点ですでに獲得していた平等な権利が失われつつあることに危機感を募らせ、人種によって分けられることをいかなる場合でも拒否し肌の色で判断されることを受け入れず断固として闘わなければならない、と檄を飛ばし続けた²⁸。しかし、理屈だけが先走り現実を顧みず、アメリカ本来の姿に返れと言うだけで改革のプランを示せないトロッターは、人望の厚い偉人ではなく孤独な奇人であり、多くの人を集めまとめる指導

Massachusetts, Conducted under the Auspices of the Finance Commission of the City of Boston (Boston: City Printing Department, 1944), 416.

²⁶ Ibid., 506.

²⁷ Joseph Marr Cronin, *Reforming Boston Schools, 1930 to the Present: Overcoming Corruption and Racial Segregation* (New York: Palgrave Macmillan, 2008), 25.

²⁸ “Trotter Says Race is Fast Losing Civil Rights,” *CD*, April 30, 1921, 3.

者にはなれなかった²⁹。1934年に亡くなった時の追悼記事ではその情熱と献身が称えられたものの、生きている間に彼を支持する人は少なく、晩年の不遇を見かねた地元の黒人女性活動家が、トロッターの60歳の誕生日を記念し彼の長年の功績に感謝を込めて彼の新聞『ガーディアン』を購読してあげましょう、と『ディフェンダー』紙上で呼びかける有り様だった³⁰。

そのトロッターの人種区分撤廃論を、個人的な人間関係においてのみならず社会構想としても受け継いだジュリアン・スティールは、それをさらに推し進め、人種を超えた新しい世界を目指して白人の社会主義者・共産主義者との協力関係を築いていた³¹。しかし彼は、トロッターに輪をかけて理論家肌だった。雇用と利用の機会を増やすために黒人用の医療機関やレクリエーション施設を作ることにも、自らを人種隔離する「愚かの極み」だとして強く反対していたスティールは、冷淡で近づき難く、有能だったが尊大で嫌われていた³²。1941年にNAACP支部長になって以降も、その

²⁹ トロッターについて（特に彼が何からの「解放」を求めていたのか）は、大森『アフリカ系アメリカ人という困難—奴隷解放後の黒人知識人と「人種」』（彩流社、2014年）、第5章を参照。

³⁰ Charles E. Freeman, Jr., “Trotter Lauded as Modern Atlas As 3,500 Mourn Boston Publisher,” *NYAN*, April 14, 1934, 1; “Wm. Monroe Trotter Kills Himself: Founder of Equal Rights League and Militant Advocate for Racial Justice Commits Suicide on 62d Birthday,” *CD*, April 14, 1934, 1; M. Cravath Simpson, “W. M. Trotter: Correspondent Makes Plea For Testimonial to Editor of Boston Guardian,” *NYAN*, March 30, 1932, 9.

³¹ Sarah Deutsch, “The Politics of Sex and Race in Boston’s NAACP, 1920–1940,” in James M. O’Toole and David Quigley, eds., *Boston’s Histories: Essays in Honor of Thomas H. O’Connor* (Boston: Northeastern University Press, 2004), 191–213.

³² Cooke, “Jealousy Caused Julian D. Steele Ouster In Boston,” 11; idem, “‘Viper’ Song Plays While Boston Discusses Steele: Estelle’s Chicken Shack Crowds Give Their Opinions on Interracial Union,” *NYAN*, May 14, 1938, 2; idem, “Claim Steele-Dawes Bridal Spurred ‘Uncle Toms’: Claim They Used

裕福な暮らしぶりとは高尚な態度と民衆への無関心と差別の被害者を救済する際の情熱の欠如が労働運動の活動家や若い世代から批判され、保身のために役員選挙を妨害したとしてその職を追われることになる³³。

だからと言って、黒人コミュニティ内で影響力を増していた西インド系の左翼知識人(スティールを追い落としNAACPボストン支部長に就任したのは、英領グレナダ島出身の牧師ケネス・ヒューズだった)が、大方の支持を得ていたわけでは必ずしもない。確かに、彼らが編集・発行していた新聞『ボストン・クロニクル』は、祖国や同胞コミュニティの情報を伝えることで黒人移民の思いに応え、労働者階級まで含めた幅広い読者を獲得し、「黒人を雇わない店では買い物をするな」という論陣を張るが³⁴、本当に貧しい人たちの暮らしを理解していたわけではなかった。後に公立学校改善運動で指導的な役割を果たすことになるルース・バトソンは、住むところを懸命に探し、ようやく公共住宅に入れることになったのに、共産主義者だと名乗る人たちから、人種隔離された団地には住んではいけない、住めば差別を許容することになると迫られたという。彼女は、自分たち

His Marriage as Pretext to Oust Him off Job,” *NYAN*, May 14, 1938, 3.

³³ Sharon Hartman Strom, *Political Woman: Florence Luscomb and the Legacy of Radical Reform* (Philadelphia: Temple University Press, 2001), 180-183; Carden, *Witness*, 68. スティールについては、大森『アフリカ系アメリカ人という困難』、170-171頁も参照。彼は毀誉褒貶が激しかっただけでなく、戦後は連邦や州の行政職を歴任する(連邦住宅金融局で働いた後、マサチューセッツで都市再開発に関わり、最後は州のコミュニティ問題担当局長になる)など、その思想や言動の変遷には不明な点も多い。総合的な評価は他日を期したい。“Steele Gets High Position With HHFA,” *NYAN*, August 20, 1960, 2; “Steele Named To Top Post By Gov. Volpe,” *CD*, September 16, 1968, 7; William A. Davis, “Massachusetts Community Affairs Commissioner Julian D. Steele, 63,” *Boston Globe*, January 18, 1970, 65.

³⁴ Violet Showers Johnson, *The Other Black Bostonians: West Indians in Boston, 1900-1950* (Bloomington: Indiana University Press, 2006), 61-63, 76-77.

「この街には人種隔離などありません」(大森)

が入ろうが入るまいが「どっちにしたって人種別なんだし」、「とにかくどうしても住むところが必要だったので」、夫と相談し、「団地に引っ越ししましょう。(差別に手を貸しているかどうかなんて、この際)関係ないわ」と心を決めた。同じく後に指導者として頭角を現すアマンダ・ヒューストンの母親は、共産党シンパとして、1930年代にはスト破りとして利用される黒人を説得して白人労働者と共闘させるべく力を尽くしていたが、黒人は変革の前衛として闘うべきだと持ち上げながらも戦略やヴィジョンの立案には関わらせない党の方針に違和感を抱き、そこに人種主義を嗅ぎ取って、距離を置くようになったという³⁵。

インテリや左翼などの黒人エリートが求めていたのが人種にかかわらない「同じ扱い」だとすれば、黒人として日々差別に喘いでいた人々が望んでいたのはその具体的な「改善」だった。そのためにも彼ら・彼女らは、黒人だけで固まるのは差別撤廃を阻害することになると非難されながらも、同じ境遇の者同士で支え合った。マーカス・ガーヴィの設立した「全黒人地位改善協会 (UNIA)」がボストンで大きな影響力をもった所以である。UNIA ボストン支部は、ガーヴィ自身が投獄・国外追放された後も勢力を保ち続ける。そこでのガーヴィイズムは、ガーヴィ自身が唱道した白人との共存の拒絶・アフリカ「帰還」ではなく、黒人としての連帯と互助を重視するものだった。しかし、子どもたちまで巻き込んだその活動は、毎週末の集会などで多くの人を励まし自尊心を育んだものの、政治に関わろうとしなかったこともあって、主流社会に働きかけ目に見える成果を上げることはほとんどできずにいた³⁶。

皮肉なことに、黒人指導者の中でこうした動きにいちばん近かったのは、1938年のジュリアン・スティーラの結婚の際に彼をショー・ハウスから追い出そうと画策したグループの急先鋒と目されていた黒人弁護士アーウィン・ドーチであった。南部出身(サウスカロライナ生まれ)でボストン大

³⁵ Carden, *Witness*, 55-56.

³⁶ Johnson, *The Other Black Bostonians*, 87-89.

学法科大学院を出たドーチは、当時 NAACP のボストン支部長をしながらショー・ハウスの理事も務めていたが、スティールの優秀さに嫉妬したものの、人種間結婚を受け入れられない固陋な白人理事に媚びへつらうアンクル・トムだの、果ては、組織の金を使い込んだのにそれを認めない嘘つきだの、さんざんなことを『アムステルダム・ニュース』に書き立てられ、個人的な遺恨と野心からスティールを排斥したと決めつけられた³⁷。しかし、自分が理事会でスティールの辞任に賛成票を投じたのは、彼の結婚を問題視したというよりも、彼が他のこと（特に左翼系の団体の活動）に時間を使い過ぎて、地域の黒人の福祉というショー・ハウス本来の目的を軽んじたからだとドーチは言う。スティールは、人種を越えた社会を作ろうとしていて、だからこそ、ショー・ハウスも NAACP も、黒人のための組織ではなく、人種間協力を促す場の一つだと思っていたのかもしれないが³⁸、ドーチにとっては、それらは黒人の生活を守る橋頭堡であった。そ

³⁷ Cooke, "Jealousy Caused Julian D. Steele Ouster In Boston," 11; "Philanthropist Call Dorch 'Uncle Tom,'" *NYAN*, May 14, 1938, 3. 横領については、事実無根だと撤回を求める決議が支部の会合で採択された。"Julian Steele Present When NAACP Passes Its Resolution: Echoes of Marriage Rumble in Boston When Group Votes for Challenge on Article," *NYAN*, May 28, 1938, 24. また、支部の執行部メンバー 10 人が後に連名で、自分たちはドーチに不満はない、むしろ NAACP をどこかの政党の付属物であるかのように考え乗っ取りかねない者たちのほうが問題なのだ、という声明を発表した。"Boston's NAACP Group Battling Over Politics: Dissension Rumors in Beantown 'Afloat,'" *NYAN*, July 2, 1938, 4.

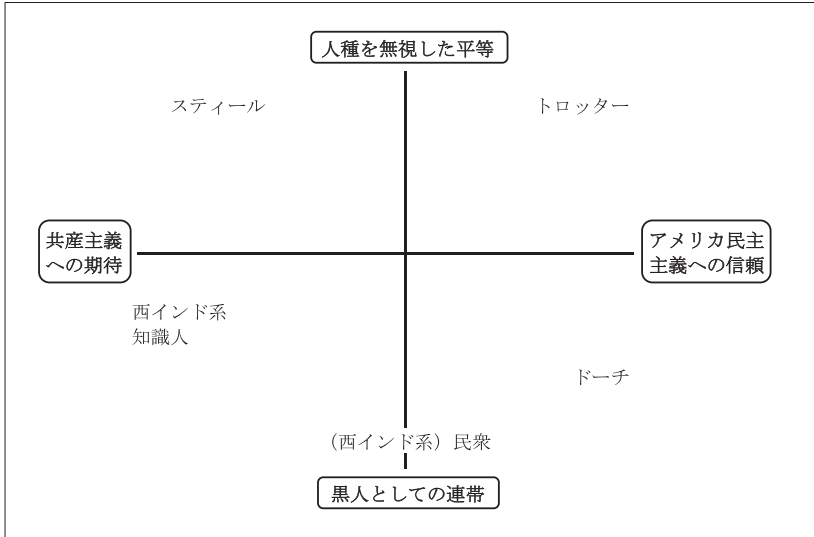
³⁸ 事実、黒人地区のコミュニティ・センターであったショー・ハウスも、黒人専用というわけではなかった。利用者のほとんどは黒人であったが、後に「ロックスベリーのファースト・レディ」と呼ばれる黒人女性活動家メルニア・キャスの回想によれば、数は少なかったが白人も来ていたという。Tahi Lani Mottl, "Interview with Melnea A. Cass, February 1, 1977," in Ruth Edmonds Hill, ed., *The Black Women Oral History Project: from the Arthur and Elizabeth Schlesinger Library on the History of Women in America, Radcliffe College*, Vol. 2 (Westport, CT: Meckler, 1991), 312.

れだけでなく、理屈をこねる温情的な白人（そしてスティールのような黒人）の博愛主義者が、理論的に間違っている、現実的にも意味がない／実現不能だといくら反対しようとも、黒人の子どもたちが気楽に通える独自のYMCAや、医師や看護師も黒人で自分たちを邪険に扱わない病院は必要なのだった³⁹。

ここまで説明してきた黒人「指導者」の散らばりを模式的に示すと、次の頁の図のようになる。アメリカ社会であれ、来るべき理想社会であれ、人種に意味を持たせるべきではないと、自らが黒人であることすら否定しようとしたトロッターやスティールの発想は、黒人民衆の思いとは大きくかけ離れていた。人種差別解消よりも万国の労働者の解放を優先する左翼は、教育と雇用の機会を制限された人々に寄り添おうとした西インド系の知識人でさえ、働く者として以前に黒人として生きていかざるを得ない現実の重みを見損なっていた⁴⁰。しかしながら、その現実を重視したドーチも、黒人のための「避難所」を作るという「撤退戦」の先に何があるのか

³⁹ Cooke, “Jealousy Caused Julian D. Steele Ouster In Boston,” 11; idem, “Claim Steele-Dawes Bridal Spurred ‘Uncle Toms,’” 3; Deutsch, “The Politics of Sex and Race in Boston’s NAACP,” 202-203.

⁴⁰ アメリカ社会党のニューイングランド事務局長で、NAACPボストン支部の執行部メンバーでもあった白人活動家のアルフレッド・ベイカー・ルイスは、1938年に次のように嘆いていた。「ボストンでは、全体の福祉のために活動している団体と共闘しようという機運が黒人の側にほとんどない。…多くの黒人や黒人組織が、いつまでも人種問題にばかり拘っていないで、人類に共通する問題に対して進歩的な態度を取ることこそが重要だと、私には思えるのだが。」Deutsch, “The Politics of Sex and Race in Boston’s NAACP,” 199. 第二次世界大戦後になっても状況は変わらず、西インド系移民二世でハーヴァード卒の共産主義者ウィリアム・ハリソンがユダヤ人との連携を集会で説いても反応は芳しくなかった。ユダヤ人は白人で、住宅地への黒人の流入を嫌って郊外に逃げ出しているのに、なぜ手を組まなきゃならないんだ、という聴衆からの反論のほうが一般の黒人の気持ちを代弁していたからである。Johnson, *The Other Black Bostonians*, 93-94.



20世紀前半のボストンにおける黒人指導者の思想配置

を示すことができずにいた。ガーヴィイズムに期待を託し、黒人としての誇りを胸に、何とか人間としての尊厳を守ろうとしていた普通の親たちの姿勢に感化された若い世代が下からの運動を立ち上げるには、1950年代を待たなければならなかったのである⁴¹。

おわりに

自由と平等の生地かつ聖地であるボストンで差別が横行していたのは、事前に差別を抑止するのではなく事後的にしか処罰されない、しかも事件として捜査してもらえないのではなく、被害者が自ら訴えなければならないという州公民権法の構造上の限界（これだと裁判を起こせない貧しい黒人は泣き寝入りするしかない）だけが原因なのではなく、むしろ、法律上／

⁴¹ Carden, *Witness*, 8-10. 大森『アフリカ系アメリカ人という困難』, 153-155, 171-176頁。

制度的には差別は認められていないからこそ黒人は「分をわきまえて」行動すべきだし、それを求めるのは差別ではないという社会的な規範の拘束力が強かったからだと言うべきだろう。ショー・ハウスの白人理事たちですら、人種平等を称揚しながら、黒人の男が「自分たちの」娘と結婚することなど考えられなかったように。そうでなければ、「黒人は雇わない」という慣行がこれほど広く深く浸透することも、差別禁止法があるのに「うちには黒人は泊めない」などの発言がこれほど自然かつ頻繁に飛び出すことも、警官や教師・カウンセラーが「場違い」だと思われる黒人を（物理的・精神的に）抑え込むような言動を繰り返すこともなかったはずである（紹介したもの以外にも、当然のように差別をしていた例は枚挙にいとまがない）。

企業が就職や消費・娯楽の機会を組織的に奪う／制限するのも、警察や学校が平等な保護や自由な選択肢を与えないのも、社会的な（＝すべての人に関わる）問題（特に後者は行政の機能不全）なのに、そうはみなされなかった。アメリカで最初に差別を禁ずる法律を制定したマサチューセッツ、就中その州都であるボストンには、人種差別などない（はずだ）からである⁴²。黒人側も、それにうまく対応することができなかった。それは、指導者を任じていた人たちが、まとまりを欠いていた（それどころか場合

⁴² ボストン市議会は、1943年暮れに、偏見や不寛容をなくすための教育の実施案を否決したが、その理由は、そのような計画を是とすれば、「ボストンに差別があることを認めることになる」というものであった。“Boston Council Rejects Plan For Racial Harmony,” *CD*, January 1, 1944, 6. これは、主に反ユダヤ主義に対処するために教育委員会が提起したものであったが、黒人を含めた異人種との相互理解を学校で推進する必要性については教育委員会自体が否定、その後もボストンの教育当局は一貫して差別をなくすための指導をカリキュラムに組み入れようとはしなかった。Zoë Burkholder, “From Forced Tolerance to Forced Busing: Wartime Intercultural Education and the Rise of Black Educational Activism in Boston,” *Harvard Educational Review* 80 (Fall 2010), 293–326.

によっては敵対していた) からだけではなく、人種などという意味のない括り方で差別をするのは個別・例外的な事象である(べきだ)と考えていたからである。彼らも、法律上の／制度的な障壁がないのだから、問題があっても、個人で解決できるはずだし、そうすべきだと考えていた。平等なのは権利だけで十分であり、それをどう使うかは各人の判断・裁量・才覚に委ねられる。だからこそ、差別との闘いも個別的で(不当な扱いを告訴する意志と資力のある者だけがそうする)、組織的な抗議行動が起こったとしても、散発的で長続きしなかった。

事態を打開しようとしたのは、大卒の「指導者」ではなく、自分は教育の機会に恵まれなかったからこそ、子どもたちには公正な環境を、と願った親(特に母親)たちだった。彼女らは、南部のように法で規定されていなくとも、a) 差別は個人ではなく社会の問題であり、b) 差別の力は上から下に向かって働き(だから自分たちを守るための団結は差別でも差別を温存させる愚行でもなく)、c) 権利の平等が保障されていても差別は起こるからこそ、d) 具体的かつ踏み込んだ対策が必要だ、という認識に、実践のなかで、至ったのである。

バトソンが、黒人用の住宅やその近隣施設を利用しながら、学校の人種分離を告発したのは、決して二枚舌を使っていたわけではない。教育委員会からもマスコミからも一般市民からも(場合によっては成功した黒人からも)、「この街には人種隔離などありません」と言われながら、実際に存在する事実上の隔離とその害悪のうちのどれを・いつ・どこで問題にすべきかを戦略的に考えていたと言うべきだろう⁴³。

こうしたたかな思考は、知識人の書斎ではなく、抑圧の現場から湧き上がってきた。本稿では、その背後の事情を、外部のメディアの目を通

⁴³ Henry Hampton and Steve Fayer, eds., *Voice of Freedom: An Oral History of the Civil Rights Movement from the 1950s through the 1980s* (New York: Bantam Books, 1990), 588-591. バトソンについては、大森『アフリカ系アメリカ人という困難』, 172-174も参照。

「この街には人種隔離などありません」(大森)

して、ある程度客観的に整理したが、古くから北部で暮らす黒人エリート
の消極的反差別論＝機会の平等＝自己責任論とは違う、南部・西インド出
身者およびその第二世代⁴⁴の積極的反差別論＝結果の補正＝相互扶助論
が、どのようにして鍛え上げられたのかを、こうした二分法から零れ落ち
るものも含め、なおかつ後者を単純に称賛するのではなくその功罪を見極
めつつ、できるだけ内側から明らかにすることが次の課題となる⁴⁵。

[付記] この論文は、平成 28 年度北海学園学術研究助成（一般研究）の
成果である。

⁴⁴ バトソンは両親がジャマイカからの移民、ヒューストンの母親はフロリダ
からの移住者だった。Carden, *Witness*, 3, 9.

⁴⁵ 資料としては、トロッターが 1901 年に創刊し、彼の死後は妹と義弟が引き
継いで 1950 年代まで発行していた新聞『ガーディアン』と、1915 年から
1960 年代まで主に西インド系の人々に読まれていた『クロニクル』が中心
となる。